

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

## 大町高校夏合宿・・・③縦走の醍醐味

(3日目:五色ヶ原—ザラ峠—獅子岳—鬼岳—龍王岳—浄土山—室堂—雷鳥平)

一年生のIの入部動機は「山でご来光を見てみたい」というものだった。今年度これまでの山行では、まだ一度もお目にかかったことがなかったが、ついにその念願がかなった。朝食(タラコスパゲティ)を済ませ、撒収をしているときに、鹿島槍から昇る朝日を目を細くしているIの顔は朝日に照らされて輝いていた。合宿3日目にしてようやく最高の天気は巡ってきた。

朝日を受けながら、五色ヶ原のお花畑を進んでいく。イワギキョウ、ウサギギク、ウメバチソウ、ミヤマアキノキリンソウ、秋の花も顔を出し始めている。(クロユリがあるはずだが、気がつかないのは残念!)ザラ峠を越え、獅子岳の登りにかかる。見た目は大変だが、晴れた日の稜線歩きは、気持ちのよいものだ。去年の秋口から入部した2年生のKは、縦走ということばに憧れていたということだったが、昨日までのアップダウンの続くコースはいわゆる稜線の縦走のイメージと違っていたこともあり、これぞ縦走という快感を初めて味わえたと嬉しそうである。思えば、この2日間は立山へ向けての長い序奏だったと言えなくもない。8時、3日目にしてはじめてのピークである獅子岳を踏む。ここで、恒例の山岳部歌を始めて歌う。行く手の鬼、龍王、さらには雄山が青空に浮かび、最高の眺望が広がっている。背後には槍ヶ岳を始めとする北ア南部の山や後立山、裏銀座の山々の姿も見え最高の気分である。富山平野と富山湾の先には能登半島も霞んで見えた。

鬼岳を越すところで、2人の小学生とその荷物を両肩に背負った青年からなる3人組と相前後して進むことになった。日本語が不如意のようなので、尋ねてみるとネパール人でシェルパ族だとのこと。現地で旅行社を営んでいる大津氏のことや、三浦雄一郎氏を知っているという。ならば、大町高校OBで、三浦氏やイモト氏のサポートをして何度もネパールに行った三戸呂拓也君のことももしやと思い、聞いてみると知っているという。なんでも五色の小屋でスタッフとして働いているとのことだった。片言ではあったが、彼の国の地震の様子などを聞いたりしながら、龍王岳とのコルに到着すると、どういういきさつかはわからないが、そこには先行していた二人の小学生の母親が待っていた。子どもたちを母親に引き渡すと、踵を返して飛ぶように小屋へ帰っていった。せっかくだからと、その前に旅は道連れと一緒に写真を撮った。下山後、三戸呂君にメールを送ったところ、「僕らはチミと呼んでいました。三浦隊のサーダーを2回勤めたシェルパの息子で、今は山奥でペットボトルの工場の社長?とかです。懐かしい。」という返事が返ってきた。縁は異なるものである。

さて、鬼岳も龍王岳も頂上は通らず、巻き道となっている。龍王岳の先、一の越との分岐にあたる富山大学の施設の脇で一本取る。ここから立山(雄山)はもう指呼の間だが、こちらは明日のお楽しみ。お預けして今日は浄土山を巡って雷鳥沢へと辿る。施設の脇を回り込むと、剣岳の雄姿が聳立していた。10:40 浄土山着。下るにつれ、登山者



浄土山にて

に加え、一般観光客の姿も散見される。これまでの人の少なかった静かな山とは打って変わってのお盆の最盛期の観光地室堂の喧騒である。

ターミナルからミクリガ池を巡り、雷鳥沢のテント場へと下る。14:00、最盛期のテント場ではあるが、思ったより空いていた。手続きを終えて早速テントを張り、その後はお楽しみのお風呂タイム。雷鳥沢では至近の2軒の山小屋で外来入浴をすることができる。

生徒もそれを楽しみにしてきている。これまでの3日間の汗を流してさっぱりした。4時、テント場に帰って部長のYに天気図を取らせる。昨日の気圧配置では前線の位置が気になっていたが、北の高気圧が張り出して少し前線を押下げている。明日も多分今日のような天気が期待できそうだ。ここは、バスで下りてから30分も歩けばテント場ということで、家族連れのキャンパーも多い。もう少し大学や高校の合宿が入っているかと思ったが、それらはほとんど見られなかった。昨日同様濡れ物を乾かし、この立山の内院ともいべき場所における大風景に身を委ねながら、優雅な時間を過ごす。

5:00ごろのことである。テントの外に出ていた山内氏が「大西先生、ちょっと手を貸して!」というので出てみると、ポールを忘れたという4人の子連れのファミリーがテントを前に途方にくれている。生徒にロープを出させ、ストックとの併用でなんとか一夜の宿を拵えてやった。周囲の誰もが見てみぬふりをしていたが、我々二人のことをどう思っていたろう。生徒にはロープワークのいい教材になった!! 夕食に取り掛かるのが少し遅れたが、天気もいい上に最後の晩ということもあり、この日は全員で外で食事を作り、食べた。本日のメニューは、マーボー春雨にポテトサラダ、白米に卵スープという極めてシンプルなものではあったが、これまで3日間のいい仕事をしてきたという充実感と一体感が夕食の味を一味上げた。



みんなで作ってみんなで食す

## 山や(登山者)としての知恵

僕はどんな山行であっても、生徒引率の際には、ロープとそれを使うためのビナやスリングは必ず持っている(持たせる)。ポールを忘れた父親をなじる息子をなだめながら、山内氏とストックを使ってツェルトを張る要領でなんとかしようとして頭の中で設計図を組み立てた。「ロープ出せ」、突然指示された生徒たちは怪訝な顔。ポールを忘れた家族の困惑、周囲の人の興味津々の顔に囲まれながら、山内氏と二人、阿吽の呼吸で、ポールのないテントを張り終えた。手前味噌だが、それなりに手際よかったと思う。ロープさえあれば、何とかなる。どうです、右のテントのできは? 忘れないのがいいに決まっている。しかし、そんな事態を打開するのも山やの知恵だ。(大西記)



一晚耐えた仮作りのテント